

ヴァージニア・ウルフ「グレイ婆さん」

A Translation of Virginia Woolf's "Old Mrs. Grey"
from *The Death of the Moth and Other Essays* (1942)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2014年9月30日受理

毎日あくせく働いている人、こころ満たされた毎日を送っている人、そういう人たちでさえ手にしたものをふいに取り落とすと言ったことが、ここイングランドでもある。落とすと言えば、週一回の洗濯物、シーツやパジャマ。手の中で形をなくし、消えてしまう。だってぐたぐた言わなくても、洗い物がないからと言ってピールさんとこまで、野を越え丘越えその洗濯物をもって行くなんてばかけてるでしょ。洗濯ひもにぶら下げるものもない。叩き伸ばしたり、アイロンがけもない。きりのない休みがあるだけ。汚れない、終わりのない休み。果てしない空間。なにものも足を踏み入れたことのない草地。野鳥が丘を越えて行く。自由に大空へと駆け上っていく。

でもこういうものも、グレイ婆さんが座っているところからは、7×4フィート(訳注:約210cm×120cm)に切り取られた部分だけが見える。それが玄関を大きく開けたときの大きさ。なんと暖炉には火が燃えている。埃をかぶったランプにともる小さな一点のようだった。押し寄せ来る陽の光にうろたえ逃げ惑うかのようだった。

グレイさんは部屋の隅の堅い椅子に座り見ていた。でも何を。きつとなにも見ていないのだ。訪れる人があっても目の焦点を変えることはなかった。焦点を合わせるのをもう止めていたのだ。もうその力もなかったのかもしれない。歳を取った眼だ。青くて、眼鏡もかけていない。見えはしても、見てはいなかった。小さいものや見にくいものを見ることはなかった。ただ顔に眼が向くだけだった。あとは皿とか野原とか。そして九十二歳になった今、のたうちながら玄関ドアを横切っていく痛みの塊しか見ていなかった。それがのたうつときグレイさんの足は振れるのだ。操り人形のようにグレイさんの身体を前後に揺するのだ。グレイさんの身体はその痛みの周りに巻き付いていた。一本の金ひもに、濡れたシーツが巻き付くように。その金ひもは眼に見えない残酷な手でけいれんを起こしたように動くのだ。グレイさんは足を投げ出した、手を投げ出した。すると痛みは止んだ。グレイさんはちょっ

との間、じっとしていた。

その姿勢で十歳、二十歳、二十五歳のころの自分を見るのだ。兄弟、姉妹と一緒に小屋を出たり入ったりしていた。十一人も兄弟がいた。金ひもが引かれる。身体が椅子の上で前に倒れる。

「みんな死んでしまった。みんな死んでしまった。」グレイさんはつぶやいた。「兄弟も、姉妹も。夫もいなくなった。娘も。でもわたしは生きている。毎朝、神様に召してくれるよう祈っている」。

朝が7×4の大きさに広がり、晴れている。麦粒を振りまいたように鳥が地上に舞い降りる。無情の手でもう一度ひねり上げられ、グレイさんは身体をねじった。

「こんな歳になっても何にも分からない。読み書きもできない。毎朝這うようにして階下に降りる。夜だったら良いのと言う。そして毎晩ベッドに這い上がるとき、昼だったらなあと言う。無知な老女。でも神様にはお祈りしている。安らかに逝かせてください、わたしは無知な老女なのです。読み書きもできないのです」。

そうして戸口から光が失われてゆくと灯りが当たっているページも見えない。何百年も口論し、歌い、話してきた声も耳には届かない。

ねじ曲げられた節々は今は静かだ。

「医者は毎週来てくれる。いまは教区の医者が来てくれる。娘が亡くなって、ニ科尔先生には来てもらえなくなった。もちろんいい人さ。いつまでもお元気ですねってあの人は言うんだ。あたしの心臓は空気と水だけになってますよって言うんだ。でも死にそうにはないねえ」。

それで私たち——人間は——肉体は金ひもにしがみついているって言う。目と耳を懲らす。でも一瓶の薬、一杯のお茶、消えかかった暖炉の炎で、納屋の戸に吊した鴉のように、自分たちの身体をそこに縛り付けておくのだ。鴉、釘を差し込まれていてもまだ生きている鴉のように。